源平の一ノ谷への奇襲（鵯越（ひよどりごえ）の逆落（さかおと）し）は、丹波篠山から始まった…

丹波篠山ロマン街道
源義経の道 マップ

伊勢三郎義盛の宝篋印塔（供養塔）

寿永３年（元暦元年、1184）、搦手（からめて）大将（敵の背後をつく軍勢）となった義経は、１万余騎を率い２月１日都をたち、４日に丹波路を進み播磨と丹波の境なる三草（みくさ）の山の東の山口・小野原（おのはら）の地に到着。この日は雪が舞っていたといいます。義経の騎馬隊１千余騎は、５日未明夜討ちを敢行。一ノ谷の奇襲に向けた最初の戦いが丹波の国境「三草山」で始まった…。

鎌倉時代から語り継がれた丹波篠山の「義経伝説」。丹波篠山に残るその足跡を訪ねてみましょう。

丹波篠山市

籠坊温泉　薬師堂

○参考文献

・神戸新聞社 1983 兵庫県大百科事典 上巻・下巻
・平凡社 1988　世界大百科事典
・朝日新聞社 1988 週刊朝日百科 「日本の歴史」
古代から中世へ 3「境・峠・道」
・角川書店 1988 角川日本地名大辞典 28「兵庫県」
・畑校区（みたけの里）1991「みたけの里歴史さんぽ」
・兵庫県 1993
「丹波ランドスケープ広域計画」報告書
・兵庫県 1994
「多紀連山県立自然公園計画調査」報告書
・丹南町 1994 丹南町史 上巻
・梶村文弥 2001「源義経」
-永遠のアイドル、謎の生涯に迫る-（あいわ書房）

監修・協力：今井 進

2020. 発刊

丹波篠山市 まちづくり部 地域計画課 景観室

〒669-2397 兵庫県丹波篠山市北新町 41

TEL：079-552-1118

http://www.city. sasayama.hyogo.jp/pc/group/keikan

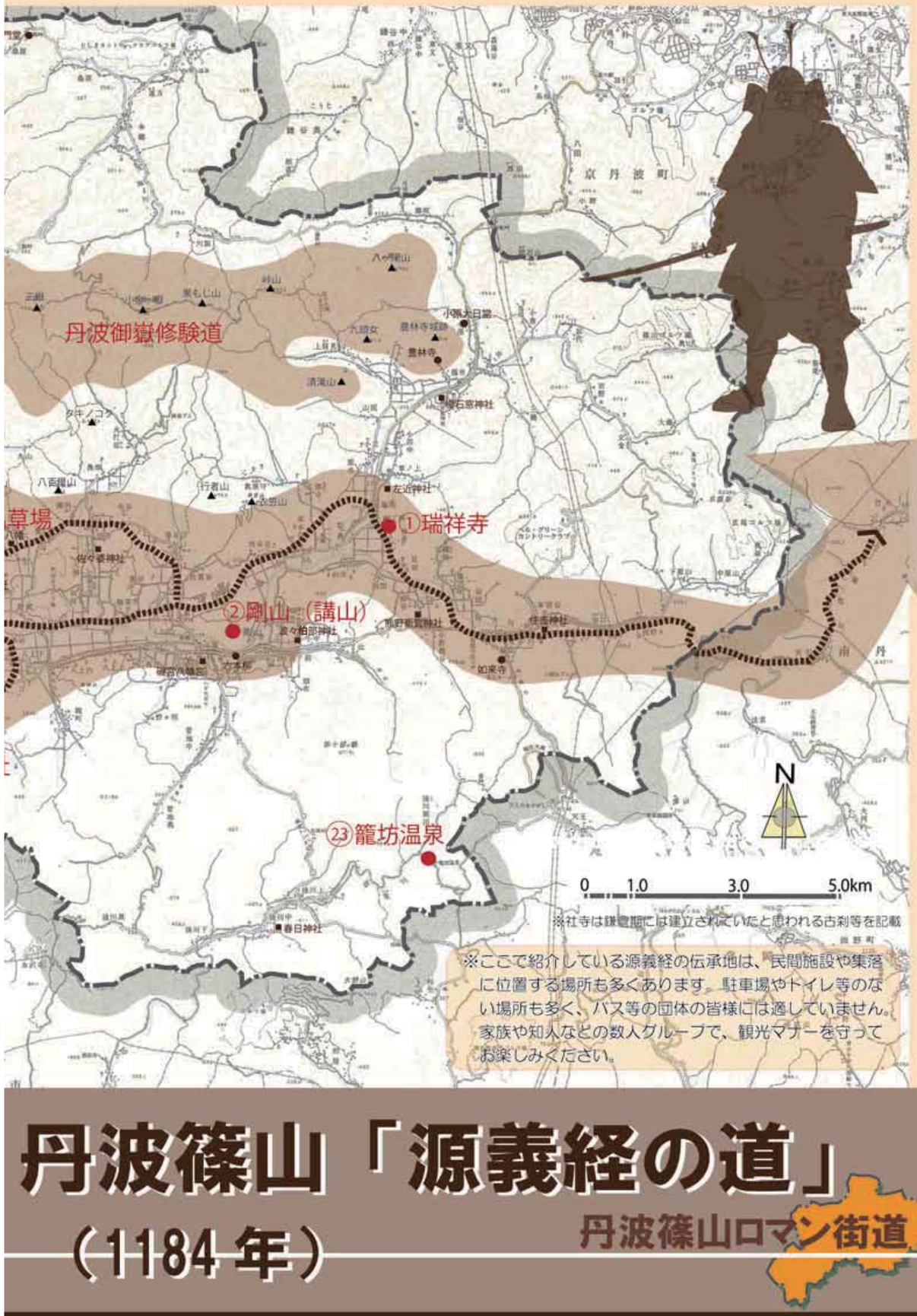
■「源義経の道」（１１８４年）

丹波篠山で語り継がれた「義経伝説の道」…

九条兼実（くじょうかねざね）の日記「玉葉（ぎょくよう）」や鎌倉幕府の歴史をまとめた「吾妻鏡（あずまかがみ）」などによると、源義経が丹波篠山を駆け抜けたのは寿永３年（元暦元年、１１８４）2月4日の夕刻から翌日にかけて、5日の未明には、平家（平資盛ら（たいらのすけもり））の守る加東郡三草山（みくさやま）の東山口である小野原（おのばら）の地に到着したといいます。

丹波篠山で語り継がれた義経伝説は、現在の国道372号線と槙ヶ峰（まきがみね）北部の道に分布しています。つまりこの2つの道は、古くから利用された丹波の古道で、特に国道372号沿いの古道は、京都と西国を結ぶ京都や播磨へ向かう道としてよく利用されたと思われます。現在も国道として利用されている区間や、忘れられた峠道もありますが、歴史に思いをはせながら、今も佇む峠の木漏れ日の道をのんびり歩いてみてはいかがでしょうか…。

※三草山の戦いは２月４日の夕刻から翌５日の夜半が定説ですが、義経が京を出立した日時については、諸説あります。「平家物語」では２月４日出立、三草山の戦いは２月５日の夕刻から、「玉葉」では「一月二十六日出門」とあり、２月１日には「追討士などみなことごとく下向」と記されています。義経の軍勢も「吾妻鏡」と「玉葉」は２万余騎、平家物語は１万騎としています。



※ここで紹介している源義経の伝承地は、民間施設や集落に位置する場所も多くあります。駐車場やトイレ等のない場所も多く、バス等の団体の皆様には適していません。家族や知人などの数人グループで、観光マナーを守ってお楽しみください。

丹波篠山「源義経の道」

（1184 年）

丹波篠山ロマン街道

■丹波篠山の「義経」伝承地

① 瑞祥寺（井串）

瑞祥寺の観音堂に那須与一宗隆の分霊を祀る。

- 義経に従軍した那須与一宗隆は、天引峠を越えたあたりから急病となり、観音寺の御本尊観世音菩薩に祈願したところ、たちまち快癒したといわれています。
- 現在、瑞祥寺は、武運長久、諸願成就、中風封じに霊験ありとされています。特に那須与一の伝承から受験生に「的を射落とす」として合格祈願者が多く訪れています。

② 剛山（講山）（泉）

南の野々垣川沿いから望む「講山」

義経が「講山」と名付けたという。

- 義経軍が到着した日、南賀寺の寺講の日で、祝日のご馳走で接待したところ、義経らは非常に喜び、寺の東の山を講山」と呼ぶようにせよと言ったという。
- 以来、西からは神山、東から甲山、南から講山、北からは剛山と呼ぶようになったと伝えられています。

- 現在、神山（剛山）にある東風山南賀寺跡は、泉八幡神社の北西の小字「青梅」か「堂谷」「堂垣内」にあった、「栄松山龍泉寺のこと」といわれています。（諸説あり）

泉八幡神社

③鷲尾三郎経春宝篋印塔（鷲尾）

義経軍は小野駅から北上し貝田あたりで籾井川を渡り、山裾を通って古山道案内の若者を鷲尾三郎（三良）義久と名乗らせ兵に加えたという。

- 泉から北街道を進んだ義経は、谷中に入り道に迷い、案内の者を探させます。茅葺の一軒家に住む老翁から鷲尾村の 17 歳の倅（鷲尾良久の三男）を紹介された。若者は、柿色の衣袴を着用し、強弓を携え、筋肉隆々で俊敏な身のこなし、義経は一見して好感を抱き、瞻することなくはきはきと答える若者に満足し、太刀、甲冑、馬を与え村名から鷲尾三郎と名乗らせ、兵に加えたと伝承されています。（諸説あり）
- 山陰道を西に向かう義経軍は、東本荘、西本荘を経て泉に着き、南賀寺から軍勢を二手に分け、一隊は土肥実平を長とし篠山川沿いの街道を義経らは北街道を進み、鷲尾三郎を加え、南下し待ちわびていた土肥実平らと合流し篠山川を渡り八上の西部に軍を進めたとされています。

④ 笛吹山（大熊・寺内）

笛の薬師

義経が笛を吹くと東の山から鼓の音が聞こえたので笛吹山、太鼓山と呼ばれるようになったという。

- 義経は、鷲尾三郎の案内で古社大売神社に参詣。東側北山の「笛の薬師」に も参り武運長久を祈願。愛用の笛を境内松の小枝に掛けると風が吹き笛音が鳴り出した。それに合わせて向山から太鼓の音が聞こえた。このため笛吹山、太鼓山と呼ばれるようになったといわれています。

※解説：「笛の薬師」

- 大同年間（806~810）円仁が山城国大原の社に籠り17日間病気回復を祈願した時「丹波国大熊村辺りに久しく土中に埋められている薬師如来を迎え奉れ」とお告げがあった。円仁は翌朝から大熊で日夜読誦すると笛の音が聞こえ紫雲が土中から立ち上る。掘ると薬師如来が現れた。一宇を建立し祀り笛吹山瑠璃寺と名付け安置したといわれています。
- 当初は北山の中腹あったがその後参拝しやすい現在の地に移したそうです。

義経が参詣したという大売神社

⑤ 馬草場（大熊）

笛吹山の懐の「馬草場」

笛吹山の懐「馬草場」、「粥場」という義経由来の地名

- 義経が三草山を目指して強行軍の途中、軍馬を休ませ草を食ませた「馬草場」、将兵達が粥の接待を受けた「粥場」等の義経に由来する地名が伝承されています。

西浜谷の毘沙門堂

⑥ 伊勢三郎義盛の宝篋印塔（供養塔）（西浜谷）

鷲尾の里で亡くなったといわれる伊勢三郎義盛の供養塔

- 義経の家臣で屈強強力の勇者の伊勢三郎義盛は、源平盛衰記では、義経が壇ノ浦の後、都落ちするにあたって暇をもらい故郷の伊勢国に帰り、守護を討とうとして追われ鈴鹿の山で自害したことになっていますが、「丹波志」では丹波山岳に身を隠したと書かれています。
- 丹波三岳の里に落ち着き義盛も心の安らぎを覚えましたが、文治２年（1189）の夏が過ぎようとするころ病の床に就き、秋を待たず鷲尾の里で亡くなり、浜谷村の湧泉山福応寺に密葬されたといわれています。
- 福応寺は西浜谷の山麓毘沙門堂の奥にあったといわれ、そこに宝篋印塔が一基建っている。それが伊勢三郎義盛の供養塔と伝承されています。

※散策ガイド

- 伊勢三郎義盛の供養塔といわれる宝篋印塔は、西浜谷の毘沙門堂の境内から西側の山道を入り、歩いて１０分 ほどの山裾にあります。

⑦馬口池（小枕）

義経由来のため池「馬口池」

・義経の軍勢が小枕を通過した時、ため池で馬の口を洗い水を飲ませたのでこの名がつけられたそうです。

⑧春日神社（鞍懸山）（小枕）

義経が鞍を奉納したと伝わる神社と地名

義経が鞍を奉納したという春日神社

・一の谷に向かう義経は、馬に乗ったまま槙ヶ峰麓の社前を通りかかると急に馬が身震いし立ち止まり振り落とされそうになった。土地の翁に聞くと「ここは勝村。春日大明神の前を乗馬のまま通り過ぎるのは無礼で神が祟った」という。義経は馬から降り、鞍を木に掛け武運を祈り鞍を奉納し進軍したといわれ、この場所を 鞍懸山（鞍掛塚、聖塚）、駒鞍村（小枕）と呼ぶようになったといわれています。

※鞍についての逸話は、「駒鞍古跡集」等に掲載されています。

・義経軍は、その後真南条街道と槙ヶ峰千軒坊の北側、岩崎・宇土街道に分かれて進軍したそうです。

⑨権頭塚（宇土）

義経が夜間行軍のため松明を作らせた人の塚

・義経が松明を作らせた権頭という者の塚と伝承されています。

・地域では「権の神さん」と呼んでいます。

⑩弘誓寺（宇土観音）（宇土）

義経が槙ヶ峰の寺院を焼き討ち

・義経が三草山に兵を進める途中、槙ヶ峰の寺院に平氏の伏兵がいるとみて家来に命じて全坊を焼き払ったそうです。その時天地山極楽寺も兵火にかかって焼失したが、文明５年（1473）玉山良石禅師により弘誓寺（宇土観音）として再建されました。

⑪胡桃畷（宇土）

胡桃の木の生えているあぜ道に平氏の物見が潜んでいたという。

・地元では「くるび畷」と呼んでいます。
かつては柳が生えていたといわれており、平氏の物見の「来るものを見る」が転じて胡桃の木の畔道になったといわれています。

⑫千首塚（大沢）

戦死者を祀った千首塚

・三草山の戦いで戦死したものの首を埋めたと伝えられています。現在は道路改修等で姿を変えてしまい首塚は大沢１丁目の阿弥陀堂横の小祠の右隣に移設されています。

阿弥陀堂横に残る千首塚

※解説：「千首塚」

・「丹波志」では、大沢の南山裾にあり、源平の乱で東軍を防ぐ先遣部隊がこのあたりで戦ったと云われる、その時戦死した者の首を埋めたところと云われている。

⑬矢降神社（南矢代）

平氏の動向を伝える矢文が落ちてきた処。

・義経軍の一部が境内で小休止していると不来坂峠に先行した物見から平氏方の動向を伝える矢文が落ちてきた所。

・落下点の矢降神社はその後才蔵坊ヶ谷の大歳神社に合祀されたと言われ、矢降神社跡地には石碑が建立されています。

矢降神社跡地に残る石碑

※解説：「矢文」の伝承

・矢降神社の祭神：高皇産霊神（タカヒフムスヒノカミ）を祀る神の降臨伝承に由来するものと言われています。

合祀された大歳神社

⑭舟瀬の源氏蛍（当野舟瀬）

大きな蛍が集まり道案内をしたという。

・舟瀬で小休止した時、義経が笛を吹くと大きな蛍が群れをなして集まり、道案内をしたそうです。

古来から舟瀬は交通の要所。大江匡房の歌が残っています。「みづきもの　はこぶ舟瀬の架け橋に　駒のひ津めの音ぞ絶えせぬ」（写真は武庫川舟瀬橋付近）

⑮名無木（不来坂宮ノ谷）

宮ノ谷で育成されている「名無木」（ハルニレ）

大年神社（不来坂）
現在その木の何代目かが不来坂の国道 372 号沿いの宮ノ谷と大年神社で育成されています。
樹高 7m ぐらいとなるハルニレの落葉高木です。

義経が武運長久を祈願した鞭から芽が吹き、大木になったという。

・義経一行は不来坂の手前で馬を止め攻撃の手順を整えるため小休止した。その時八幡神社に武運長久を祈願して鞭を地面に突き指し「源家長久ならば芽を生じ盛大に繁茂せん」と言って合戦に向かった。後日、見事に芽を吹き大木に成長。村人の誰もがその木の名を知らなかったので「なし木」と呼ばれるようになったといわれています。

⑯ 集い（小字）・集い坂（坂名）　（住 山）

二手に分かれた義経軍が集結した場所

小字名の残る集いの景観

義経が兵を集めた集い坂

・真南条街道と岩崎・宇土街道に分かれていた義経軍が夕刻に終結した場所。
全軍がこの谷あいに終結したのち、不来坂と集い坂に分かれ進軍したといわれています。

⑰ 不来坂峠　（不来坂・辰巳）

平氏の兵がいなかったことに由来

標高 254m の不来坂峠

・平氏の軍勢がこの峠に布陣していると思ったが、いなかったので「まだ来ぬ坂」と呼ばれるようになったそうです。

⑱ オロ峠　（油 井）

平氏が退却した峠

・襲撃された平氏がオロオロしながら逃げたといわれる峠。
平氏と源氏が襲撃を警戒しながら超えた峠、あるいは源氏の騎馬武者が母衣を連ねて進撃した峠ともいいます。

現在のオロ峠

⑲ 休場　（休 場）

源氏が戦い前に休んだ集落という

・源氏の軍勢が戦い前に休憩した集落と云われています。

茅葺の残る休場集落

⑳ 会ヶ峰　（辰巳）

不来坂を超えた部隊と合流した場所

・集い坂を超えて四斗谷に入った源氏勢はトンガリ山の上空に輝く妙見星を目標に山麓に集まり、不来坂を越えた部隊と合流したといいます。
・辰巳の薬師堂の裏手妙見宮辺りに集合し、小野原へ向かったと伝えられています。

井根口池から望むトンガリ山

㉑ 偽か首　（四斗谷）

案山子で兵を偽装したという

・「篠山封疆志」（1716）に「偽か首、小野原村の北にあり。（略）平資盛先隊の士卒ここに至り、甲冑を樹頭に懸け、偽りて陣列を無し…」とあり、平資盛が案山子を作って伏兵が潜んでいるように偽装したと云われています。

四斗谷を結ぶ黒石谷の峠道

黒石の峠道にある道標

㉒ 只越峠　（市 原）

峠の石碑

義経が越えた峠

・平氏が逃亡した後、義経は丹波から播磨への国境を平家の抵抗を受けることなく超えた峠として名づけられたそうです。

㉓ 籠坊温泉（薬師堂）　（籠 坊）

薬師堂

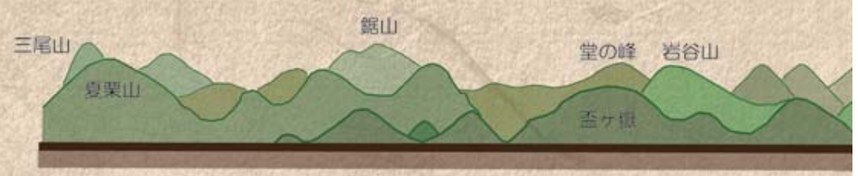
薬師堂参道

平氏の落人伝説地

・一の谷の合戦（1184）で敗れた平氏の落ち武者が隠れ住んだ里。
・冷泉で傷の手当てをし、薬師堂を建て、死者の冥福と平穏を祈ったという。今も五輪谷、籠谷に平家一族の五輪の塔が残っています。

多紀連山の山並み（小枕から）

丹波御嶽修験道－多紀連山の山並み



○丹波篠山「義経」伝説の歴史的背景と三草山の戦い

■平安末期一院政期の丹波

後白河上皇の院政期には、院が国主・国司を任命していました。

治承３年（1179）の丹波国は、平清盛の娘婿の藤原兼雅の知行国となり、国司の長官は藤原兼雅の弟の藤原行雅が勤めていました。治承４年（1180）源頼朝、木曽義仲らが挙兵すると治承５年（1181）１月平清盛は、丹波・近江・伊賀・伊勢の総管に平宗盛を任事します。２月には平盛俊を丹波諸庄園総下司（国司総括官）とし、平清盛の養子平清邦が藤原行雅の後に就きます。すなわち、丹波の国衙、荘園は平氏政権の支配下にあり、丹波国は、平氏に服従した重要な兵站地となっていました。

■平氏追討の院宣下る

「玉葉」の寿永３年（元暦元年、1184）１月29日の条には、「一月二十六日出門」とあり、平氏を追討する軍勢が京を出発しています。平家物語には、搦手大将（敵の背後をつく軍勢）となった義経は、１万余騎を率い２月４日「都をたって丹波路にかかり二日路を一日に打って播磨路と丹波の境なる三草の山の東の山口・小野原の地にこそ着きにけれ」とあります。この日は雪が舞っていたと思われます。義経の総勢1000～1500、全員馬に乗り、源範頼より一足早く２月2日か3日に老ノ坂を進発したと推測されます。義経軍は、丹波路の亀岡、園部、丹波篠山などを昼のうちに駆け抜け、４日の夕方には、播磨境に近い今田町の小野原に着きます。夜討ちをかける三草山の戦いが２月５日の未明ですので、篠山盆地に入った義経軍は、１日半程度の強行軍で丹波篠山を駆け抜けたと思われ、数多くの伝承を残しています。

●三草山の戦い

安徳天皇を奉する平氏勢は、一の谷に拠り、裏街道である京街道（播磨道、現国道３７２号）を固めるため平資盛を大将に平有盛、平忠房、平師盛ら3,000余騎が三草山西側の麓（丹波篠山市と加東市の境の山麓）に陣を張った。寿永３年２月４日夕刻、義経軍は3,000に膨れ上がり、小野原に到着。軍議を開き、田代冠者信綱や土肥実平らの進言により夜討ちに決定し、２月５日慣行する。

小野原一帯に火を放ち、その明かりの中を全軍いっせいに水梨峠から和田寺山の西麓をかけ、東条川上流の明神川を渡り、市原を経て只越峠を越え、三草山の西の山口・馬瀬に陣を張る平資盛、平有盛らの軍に殺到した。不意を突かれた平氏軍はあっという間に５００人ばかりが打ち取られたという。混乱状態となり、平資盛・平有盛らは播磨の高砂へ逃げ、平師盛らはちりじりになりながら一の谷へ退却した。これが一の谷の合戦の前哨戦と云われる「三草山の戦い」である。

この戦いで和田寺山山頂にあった東光寺をはじめとする多くの民家が焼かれた。主な合戦場は、現在の加東市上鴨川、馬瀬、山口辺りと云われ、「百旗跡」（義経が勝利の後、源氏の白旗を林立した場所）など加東市側にも多くの伝承を残している。

■平氏滅亡後の義経と頼朝

平氏滅亡の知らせが鎌倉に届いたのは、元暦２年（文治元年、1185）４月１１日。源頼朝は、最も信頼する梶原景時の報告を真実味あるものとして義経の独断専行型行動に不信感を抱き、さらに義経が後白河上皇の恩賞を勝手に受け任官し、平大納言時忠の娘を娶る等、公家社会に近づいたことも罰すべきとして、源頼朝は義経を勘当します。義経は、異心なき旨の起請文を送り、釈明のため平宗盛などの捕虜を連れ５月７日関東に向かいます。しかし源頼朝は平宗盛らを受け取っただけで、義経の鎌倉入りを拒み、義経は腰越から公文所別当（長官）の大江広元あてに「腰越状」を送りますが、源頼朝は無視します。義経は「関東に怨みのあるもの自分についてこい」と言い放ち、６月９日京都に引き返します。源頼朝は直ちに義経に与えた恩賞を没収し、偵察として上洛させた梶原景季から「義経に叛意あり」と報告を受けた源頼朝は、義経の追討を決意し、１０月９日土佐坊昌俊を追討軍として派遣します。１７日土佐坊昌俊は、六条室町の義経邸を急襲（堀川の夜討）、その後頼朝自ら義経を征伐するため鎌倉を発ったという知らせが京に届きます。

■丹波御嶽修験道と源義経について

西ヶ嶽山頂

西ヶ嶽の愛染窟

毘沙門洞

■義経の都落ち

文治元年（1185）１１月3日、義経は源行家らとともに豊後の豪族緒方惟栄の処に向かうため都落ちします。緒方惟栄は義経を迎えるため天険要害の地に岡城（大分県竹田城）を築いたと云います。義経に従う手勢２００余騎、摂津の渡辺党を頼って大物浦（尼崎）から６日の夜半出港しますが、嵐に襲われ難破、九州渡航の夢は破れ、家来の大半が行方不明となります。大阪住吉浜に漂着した義経に従う者は、静御前に武蔵坊弁慶ら数名と云われています。山伏姿に身を変えた義経主従は、雪の吉野山にわけ入り、２８日吉水院に到着。わずか五日で再び雪の吉野山山中へ、その後の行方は知れず、伝説の世界となります。記録では、その後義経らは、文治２年の秋から翌３年春頃に藤原秀衡の平泉に入ったとされています。丹波篠山では、それまでの約１年ほどの間、御嶽に住したと伝えられています。

■義経、丹波御嶽修験道へ

丹波篠山では、追手に追われる中で義経は衆議を開き、「丹波御嶽」を落ち着き先に決めたと伝えられています。天正期写本の「義経記」には、丹波鷲尾村出身の鷲尾三郎経春が、義経主従の逃避行先にふるさと御嶽を進言したと記され、「かくまで山野を分け逃げるとも、鎌倉殿の詮索は所詮旬日に迫っております。土豪勢を破るは易けれども、それとて一時のこと。私が考えまするにわがふるさと（丹波御嶽）こそ塵外の霊域、御方々をかくまい参らせるに格好の山処。幾年たりとも御心を安んじ給うに足る処と心得まする」と提案したと記載されています。

鷲尾三郎は、単身丹波修験道の一大根拠地となっていた多紀連山の御嶽、大本山大岳寺の管主を訪ね、義経主従の保護を願います。快諾の返事を得た鷲尾三郎は、鞍馬に戻り準備が整ったことを告げ、峰続きの丹波山中に入り、勝手知った鷲尾三郎が樵や猟師の道を巧みに案内し、畑山のふもとに到着したと云います。大先達に迎えられた義経らは用意された里坊に入ります。時は文治２年（1186）の春、義経は多紀連山御嶽に常陸坊海尊、片岡八郎弘経、駿河次郎清重、伊勢三郎義盛、熊井太郎、鷲尾三郎経春らとともに落ち着いたといわれています。

岩盤の三嶽山頂

三嶽の行者堂

三尾山の夫婦岩

日ヶ奥渓谷の雄滝

夜見の大滝

■御嶽の義経

源頼朝は、平氏滅亡によって平氏に服従していた武士たちの所領を没収し、東国武士を義経探索の命を与えて新補地頭を配します。

畑山の里坊における義経主従は、修験者の援護を受け安住の地を得ることができたといいます。丹波篠山の里人にも溶け込み、修験道の修行に励みながら文武を伝授したと伝えられています。義経が「笛吹山・太鼓山」を命名した伝承は、三草山への行軍中ではなくこの時のものともいわれ、山里の生活に慣れた義経を鷲尾三郎経春が案内し、丹波篠山の寺内の古社大売神社を参詣させ、東側の笛の薬師にもお参りし、「笛吹山・太鼓山」を命名したと伝承されています。